
MOON-4 夜叉 2 < 1 7 > -第2部完

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 2 <17> - 第2部完

【ZPDF】

Z0142Z

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

和人と記憶を共有している事に気付いた裕希は、再び新宿に足を踏み入れる・・・そこで待っていたのは・・・

MOONシリーズ『夜叉2』完結です。

4・記憶・2（前書き）

『夜叉』の原稿が終わったら「腑抜け」になってしまった海斗（一
一）——

まだ、半分です、『夜叉』（滝汗）

学校を飛び出した裕希は電車に乗り、新宿 大京町のマンションへと向かっていた。

昼間のわりと空いている車内で、裕希は考える。

(もし和人が - - そして俺の中にある和人の『記憶』が九桜の復活の鍵を握っているのだとしたら、桜も榊も俺たちにそう簡単に手を出せないはず。)

朝子と『眠る』和人がいるはずの、大京町のマンション。
(和人の影響かな・・・・・俺。ずっと新宿の中にいたし)
何故、和人の記憶を裕希が持っているかが裕希自身にも判らない。
ただ、桜たちに対抗出来る力があるかも知れない - - それが、
望み。

秀はあの夜、榊に奪われたまま行方が判らない。
たぶん、桜の所に捕らわれているんだな、と思う。

電車で30分。裕希は新宿へ着き大京町のマンションを田指した。
人混みをかき分け走る。

(『昼間』だったら、九桜の側も動けないはず。)

そのマンションの8階に着き、静かな廊下を部屋へと向かう。
合い鍵は朝子からもらっていた。

銀色のそれを、白いドアの一角に差し込み、

キー・・・・・

ドアを開ける。

「え・・・・・・・」

そこには、何もなかつた。

いつも玄関に入ると見える黒いソファもカーテンさえも何もなか

つた。

人の住んでいた気配すらない、密室。

「・・・・・」

『おうちへ帰りなさい、裕希くん。』

朝子の最後の台詞が甦る。

「 - - - 」

裕希はゆっくりと室内に入り、南側に位置する和人の部屋のドアを開けた。

キー・・・・・

そこで眠つてゐるはずの和人の姿も、彼に寄り添う朝子の姿もなかつた。

「どうして」

裕希は、叫んだ。「どうして…そんなに俺が頼りにならない…?悔し涙が頬を伝う。「俺、やつと守りたいもの見つけたのに。」

悔しさだけが心の中に広がる。

(どうしたらいい?どうしたら桜を倒せる?)

再びリビングに戻つた時、

「裕希。」

玄関の方から聞きなれた声が聞こえてきた。
視線を移す…そこには、秀の姿があった。

「!・・・・・」

一瞬、言葉を失う。「・・・・・秀さん。」

秀はいつもの様にEDWINのGパンにTシャツ姿で立つていた。
それが本当に秀なのか、戸惑う裕希。

「本当に秀さん?」

裕希が尋ねる。「桜に捕まつたんじゃないの?」

「あんな奴に尻尾振る俺じゃないっしょ。」「ヒルな笑顔を浮かべる。

秀だった。

「秀さん、心配したんだから！」

彼に駆け寄り見上げる。「皆どつか行っちゃうし、和人も朝子さんもいないし。どうして？」

「・・・・・」

秀は少し沈黙し、やがて、

「裕希。一緒に行こう、その方が安全だ。」

と、右手を少年に向かって差し伸べる。

「うん！早く桜を倒して和人と朝子さん探さなきや！」

裕希は微笑み、その手を握ろうとした。

刹那。

『駄目だ、裕希！』

和人の『声』が聞こえた。

「え？」

裕希は思わず、振り返った。しかし、そこはやはり無人の室内。

「・・・・・」

「どうした、裕希。」

秀が無表情に尋ねる。

「うん。」

彼は素直に、「今、和人の声聞こえなかつた？秀さん。」

「和人？」

秀は少し目を細めた。

裕希はそれを見逃さなかつた。

その闇色の黒曜石が煌めくのを・・・・・

「『めん、秀さんっ！』

裕希は秀に体当たりをして、玄関の扉を開いた。肩越しに、
「『めん、秀さん。でも、俺、桜に捕まる訳にはいかないんだ！
和人を・・・・・そして朝子さんや本当の秀さんを取り返した
いんだ！』

それだけ告げると、

バタンッ

思い切りドアを閉めて、今来た廊下を走りだした。階段を駆け降りる。

エレベーターは既に他の階に移っていた。

（逃げなくちゃ！）

全力疾走で、階段を飛び降り、マンションの前に出る。
『闇』が動き出す前に、裕希は逃げようと思っていた。

「秀。」

何処からか少女の声が聞こえた。

「判つてるさ。」

秀は頭を振り、「欲しいんだろ、篠原裕希が。」

残されたマンションの一室で、そう呟く。

「逃しはしないぜ、篠原裕希。」

闇色に光る瞳で、秀はそう言った。

新宿には、間もなく夜が訪れる。

4・記憶・2（後書き）

a · n · j e 1 1 にハマつてゐ方いませんかー？（海斗かなり遅
れてる。 。 ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0142n/>

MOON-4 夜叉 2 < 17 >-第2部完

2010年10月13日04時50分発行